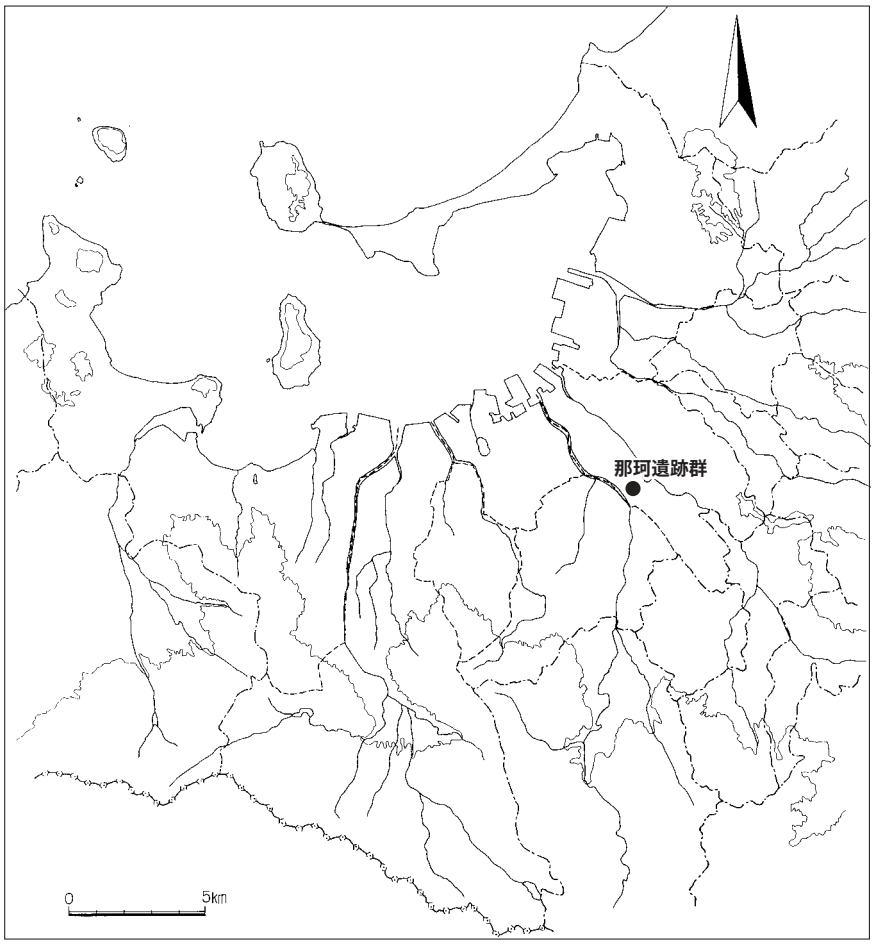
福岡市埋蔵文化財調査報告書第844集

那　珂 40

－那珂遺跡群第 96 次調査報告－

２００５

福 岡 市 教 育 委 員 会



遺跡略号　NAK-96
調査番号　0413

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群第96次調査においても、発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、福岡市消防局をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成17年３月31日
福岡市教育委員会
教育長　　植木　とみ子

例　言

１．本書は福岡市教育委員会が平成16年度に博多区竹下５丁目452－１番地において実施した那珂遺跡群第96次調査の発掘調査報告書である。
２．遺構の実測は長家伸が行った。
３．遺物の実測は長家が行った。
４．製図は長家が行った。
５．写真は長家が撮影した。
６．本書で用いる方位は磁北であり、座標北から６°西偏し、真北から６°18′西偏する。なお座標は但し書きの無い場合は日本測地系を使用している。
７．本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は掘立柱建物（ＳＢ）、ピット（ＳＰ）である。
８．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
９．本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	０４１３	遺跡略号	ＮＡＫ－９６		
所 在 地	博多区竹下５丁目452－１			分布地図番号	38－0085
開発面積	142.75㎡	調査対象面積	142.75㎡	調 査 面 積	90㎡
調査期間	平成16年４月５日～平成16年４月19日			事前審査番号	15－１－21

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査にいたる経過……1
　2　調査体制……1
Ⅱ　調査の記録……2
　1　調査経過……2
　2　遺構と遺物……7
　　1）掘立柱建物……7
　　2）その他のピット及び包含層出土遺物……12
　　3）小結……12

挿図目次

第1図　調査区位置図1（1/50,000）……3
第2図　調査区位置図2（1/4,000）……4
第3図　調査区位置図3（1/500）……4
第4図　調査区全体図（1/80）……5
第5図　ＳＢ101実測図（1/60）……8
第6図　ＳＢ102及び出土遺物実測図（1/60、1/3）……8
第7図　ＳＢ103及び出土遺物実測図（1/60、1/3）……10
第8図　その他のピット出土遺物実測図（1/3）……11
第9図　包含層出土遺物実測図（1/3）……11

写真目次

写真1　調査区南壁土層……2
写真2　調査区東半部全景（北から）……6
写真3　調査区南西部全景（北から）……6
写真4　調査区北西部全景（東から）……7
写真5　ＳＰ06土層……9
写真6　ＳＰ07土層……9
写真7　ＳＰ08土層……9
写真8　ＳＰ11土層……9
写真9　ＳＰ13土層……9
写真10　ＳＰ14土層……9
写真11　ＳＰ39土層……10
写真12　ＳＰ40土層……10

Ⅰ　は　じ　め　に

１　調査にいたる経過

平成15年５月13日付け消管第149号で福岡市消防局総務部管理課長　中牟田博氏より埋蔵文化財課長宛に福岡市博多区竹下５丁目452－１番地の物件に関して、博多消防団那珂分団車庫移転改築工事に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号15－１－21）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号38－0085・遺跡略号ＮＡＫ）に含まれている地点であり、対象地周辺でも多くの発掘調査が行われている。この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上平成15年６月25日に申請地内の試掘調査を行い、現況地表面から100㎝の鳥栖ローム層上面でピット等の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い（教埋第195号）、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、申請地142.75㎡全体を対象として平成16年度単年度で発掘調査、資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成16年４月５日～平成16年４月19日である（調査番号0413）。調査面積は90㎡、遺物はコンテナ５箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては福岡市消防局をはじめとする関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

２　調査体制

事業主体　福岡市消防局
調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文課財課長　　山口譲治
　　調査第２係長　　池崎譲二
調査庶務　文化財整備課　御手洗清
調査担当　調査第２係　長家伸
調査作業　澄川アキヨ　中村フミ子　岩本三重子　越智信孝　藤野トシ子　中村サツエ
　　藤野幾志　西川シズ子　宮崎幸子　桒野孝子　中島道夫　川下信弘

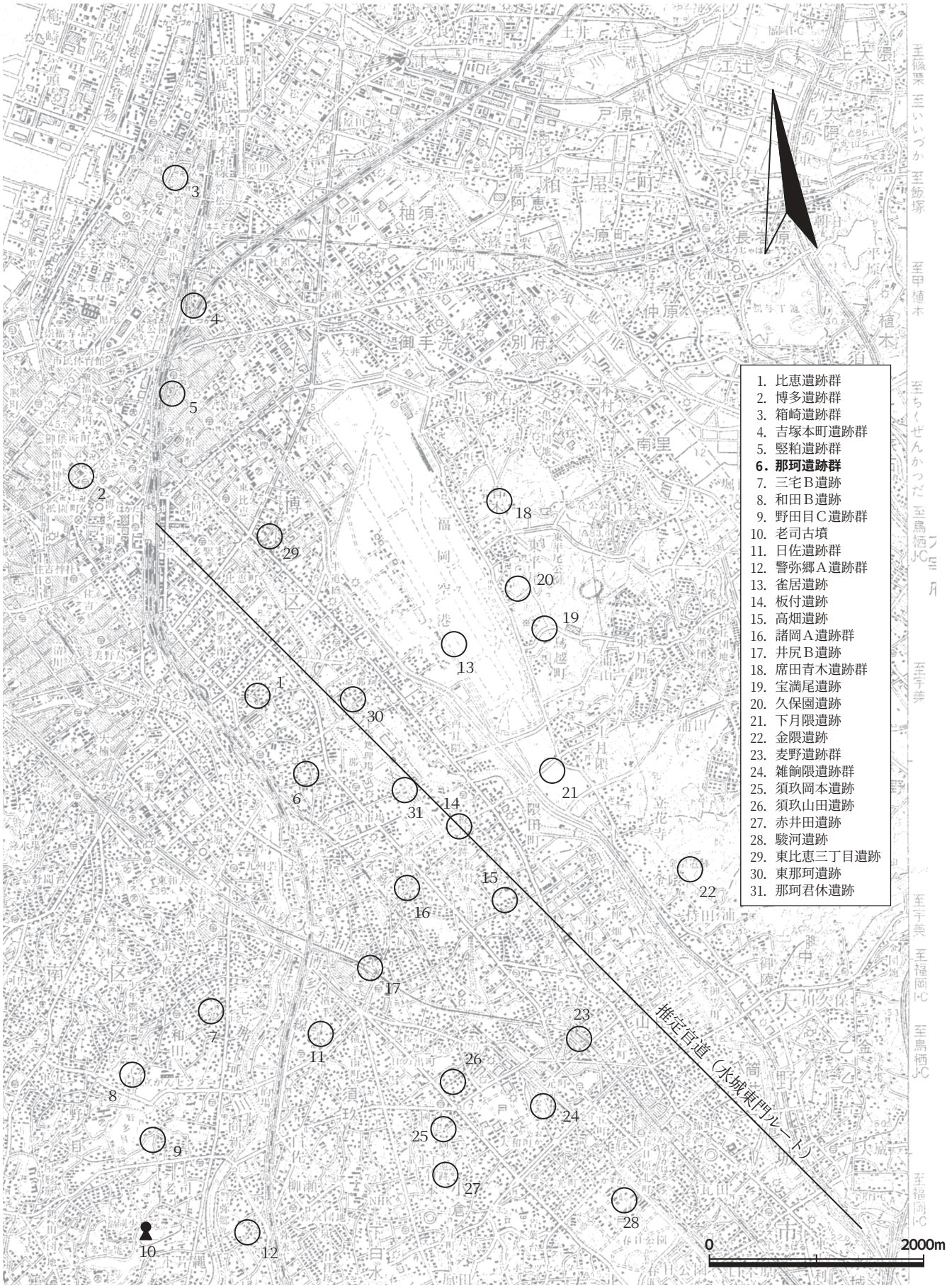
Ⅱ　調　査　の　記　録

１　調査経過

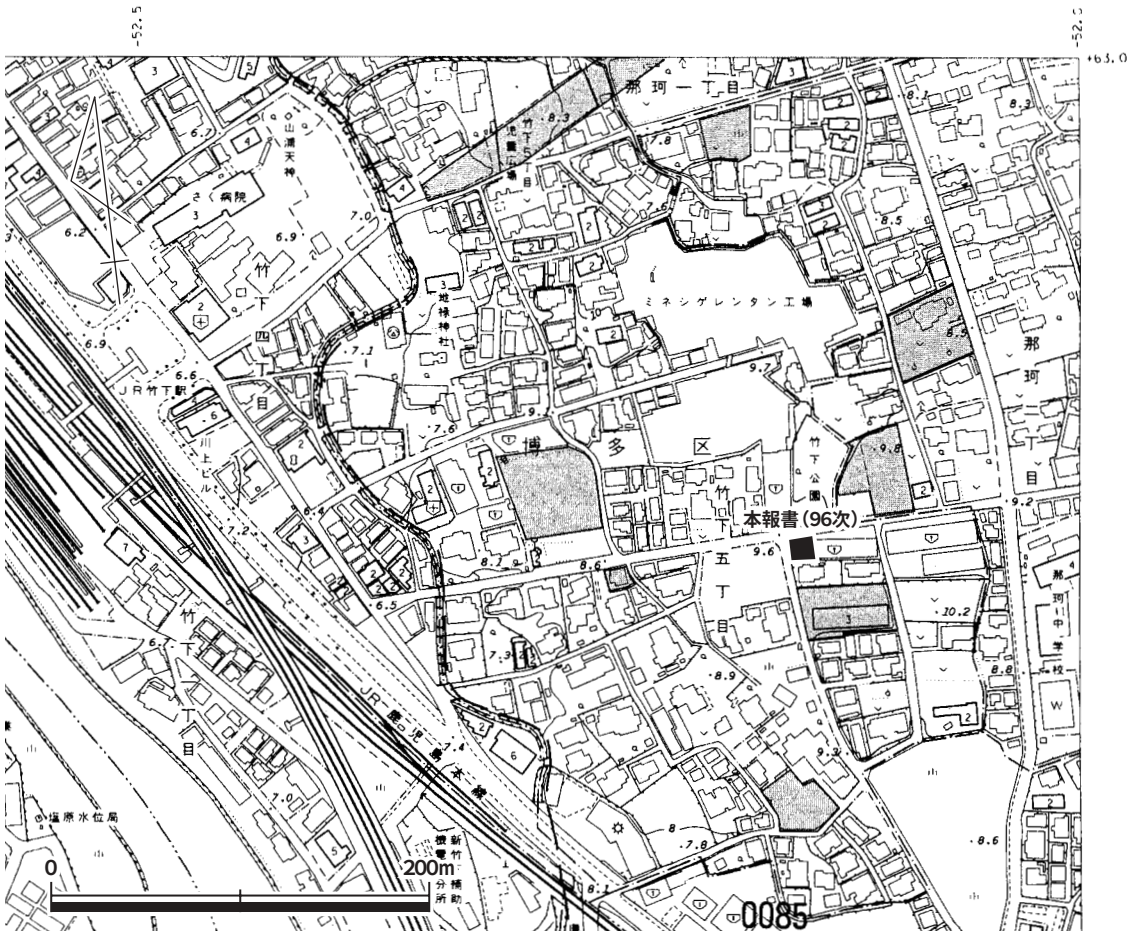
那珂遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八女粘土層・鳥栖ローム層・新期ローム層が堆積している。北側に隣接する比恵遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北2.4㎞、東西１㎞に及ぶものと考えられる。

今回の調査対象地はこの丘陵の南側に位置する。以前レンタン工場の倉庫として使用されていたところであり、現況は建物解体後、標高9.8ｍ前後の更地となっている。調査は廃土処理の関係上、土砂を反転しながら３回に分割して行うこととした。また周囲には安全上の残地を確保したため、結果的に未調査の部分が残っている。調査は重機による表土除去から行っている。表土を20㎝程除去すると、倉庫以前の耕作土壌（厚20㎝）が広がり、この下層に褐色土（上層）・暗褐色土（下層）の２層の包含層が堆積し、この下が基盤の褐色ローム層となる。ローム層上面の標高は東側8.95ｍ、西側8.75ｍとなり、西側に緩傾斜している。調査は上層包含層（褐色土）上面から行った。この結果包含層は上層30㎝、下層10㎝程度の厚みを有し、上層からは土師器・須恵器・弥生土器に混じって少量であるが青磁・白磁、土師皿等が出土しており、少なくとも中世以降の堆積と考えられるが、近世に位置付けられる遺物は認められない。また下層からは土師器・須恵器等古代を中心とした遺物が出土している。検出遺構はピットのみで、古代に位置付けられる掘立柱建物３棟をまとめることができた。３棟は主軸方位・配置・埋土等の同一性より、時期的な差異の少ない一連の建物群である可能性が高いものと考えられる。遺物は小破片であるため時期の明らかなものは少ないが、古墳時代後期～古代に位置付けられるものが主体を占める。土層観察の結果から、平面的には不明瞭であったものの、建物を構成するピットは下層包含層上面から掘り込まれていることが確認できた。この他にもまとめきれていないピットが多くあるが、出土遺物は弥生時代中期後半及び古墳時代後期～古代に位置付けられるものであり、この時期の遺構に伴うものと考えられる。なお本調査地点の南東側に位置する第41次調査において旧石器時代に属する石器が認められているため、検出面から20㎝程ローム層の掘り下げを行ったが、本地点では出土しなかった。

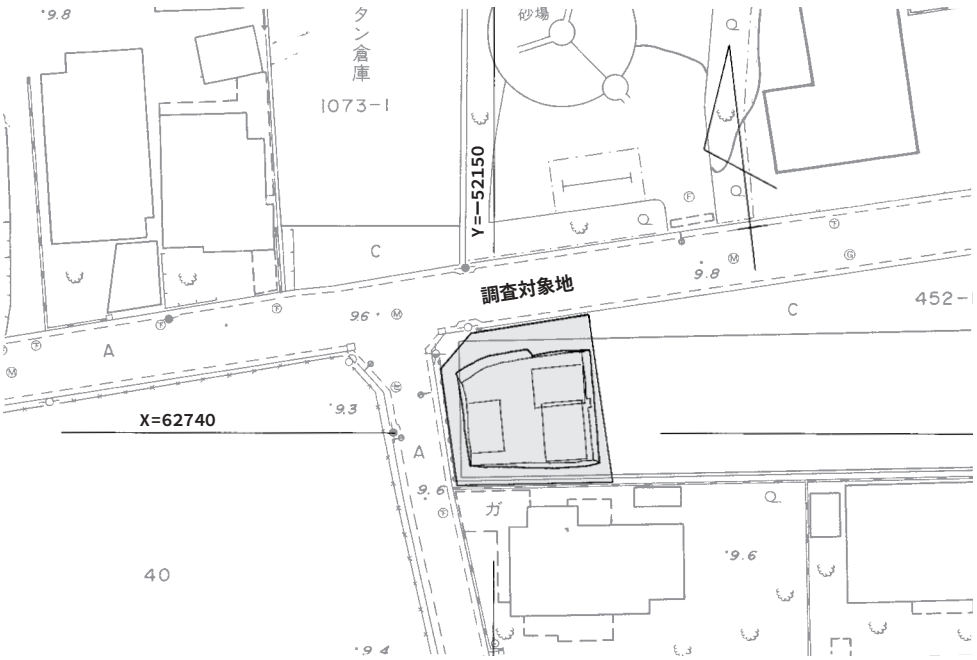
写真１　調査区南壁土層



第１図　調査区位置図１（1/50,000）



第２図　調査区位置図２（1/4,000）



第３図　調査区位置図３（1/500）

1．褐色土（包含層上層）
2．暗褐色土（包含層下層）
3．暗褐色土（黄褐色ロームブロックを含む）
4．暗褐色土と黄褐色ローム混合（1:1）
5．暗褐色土と黄褐色ローム混合（1:1）
6．暗褐色土
7．黄褐色土（暗褐色土ブロックを含む）
8．暗褐色土
9．暗褐色土（黄褐色ロームブロックを含む）
10．暗褐色土
A．褐色ローム
B．黄白色ローム
A・Bは地山ローム層

第4図　調査区全体図（1/80）

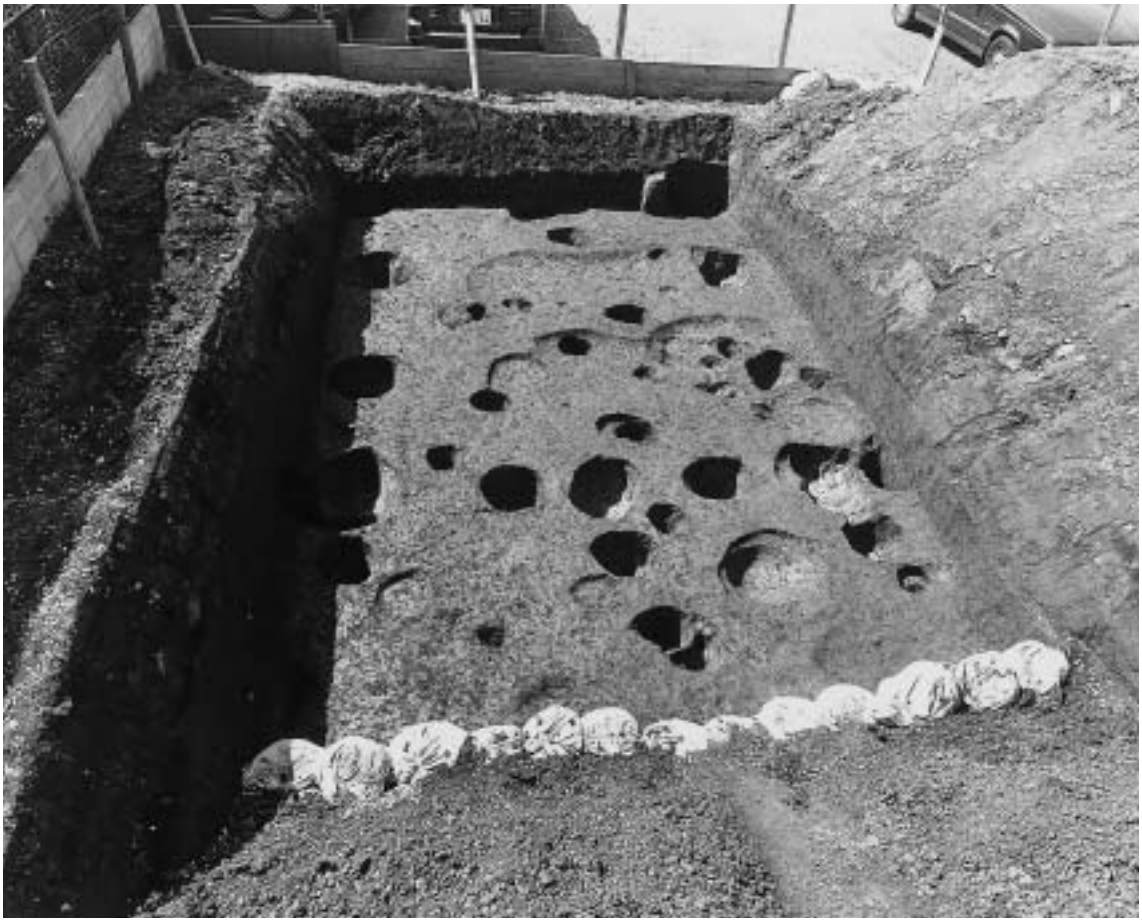


写真２　調査区東半部全景（北から）

写真３　調査区南西部全景（北から）

写真４　調査区北西部全景（東から）

２　遺構と遺物

１）掘立柱建物

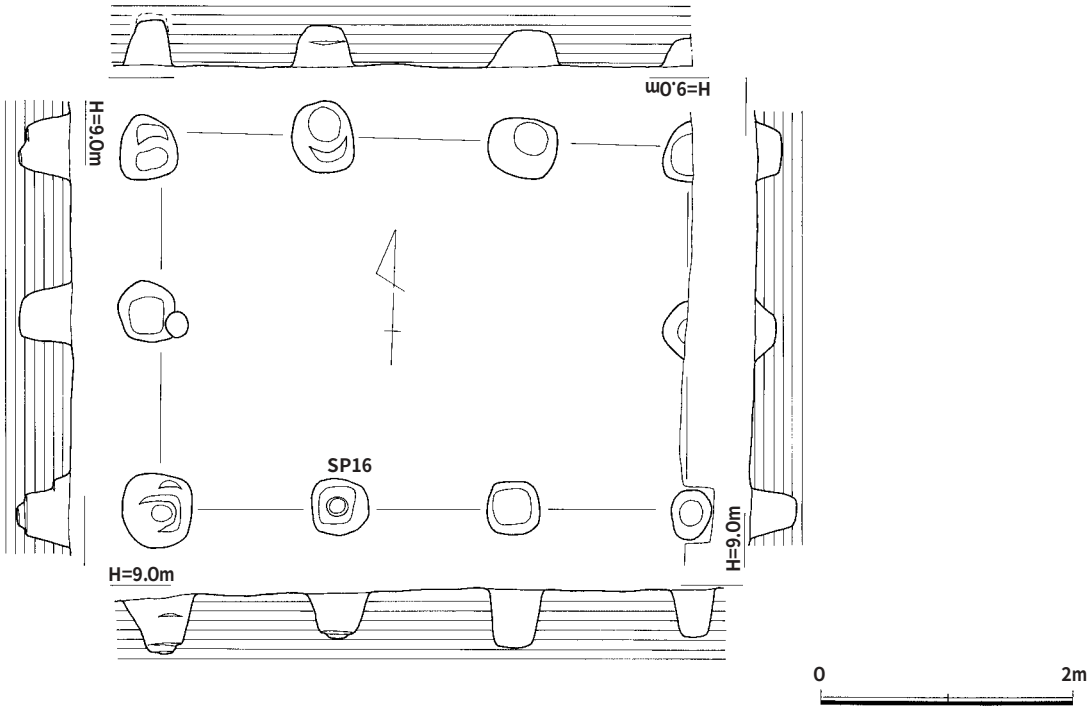
今回３棟の掘立柱建物を抽出することができた。いずれも埋土が暗褐色土と黄褐色ロームの混合土を主体とするものである。また土層観察から本来は褐色ローム上層の暗褐色土包含層上面から掘り込んでいることが確認できた。それぞれの建物は方位・配置などから有機的な関連をうかがわせるものであり、一連の建物群を構成していた可能性も考えられる。出土遺物はそれほど多くはないが包含層下層の出土遺物もあわせて、時期的にはいずれも小田編年Ⅶ期に相当するものと考えられ、８世紀代の範疇で考えておきたい。また建物ピット柱には弥生時代の遺物のみを出土するものがあり、竪穴住居跡が存在していた可能性も考えられる。

ＳＢ101（第５図）

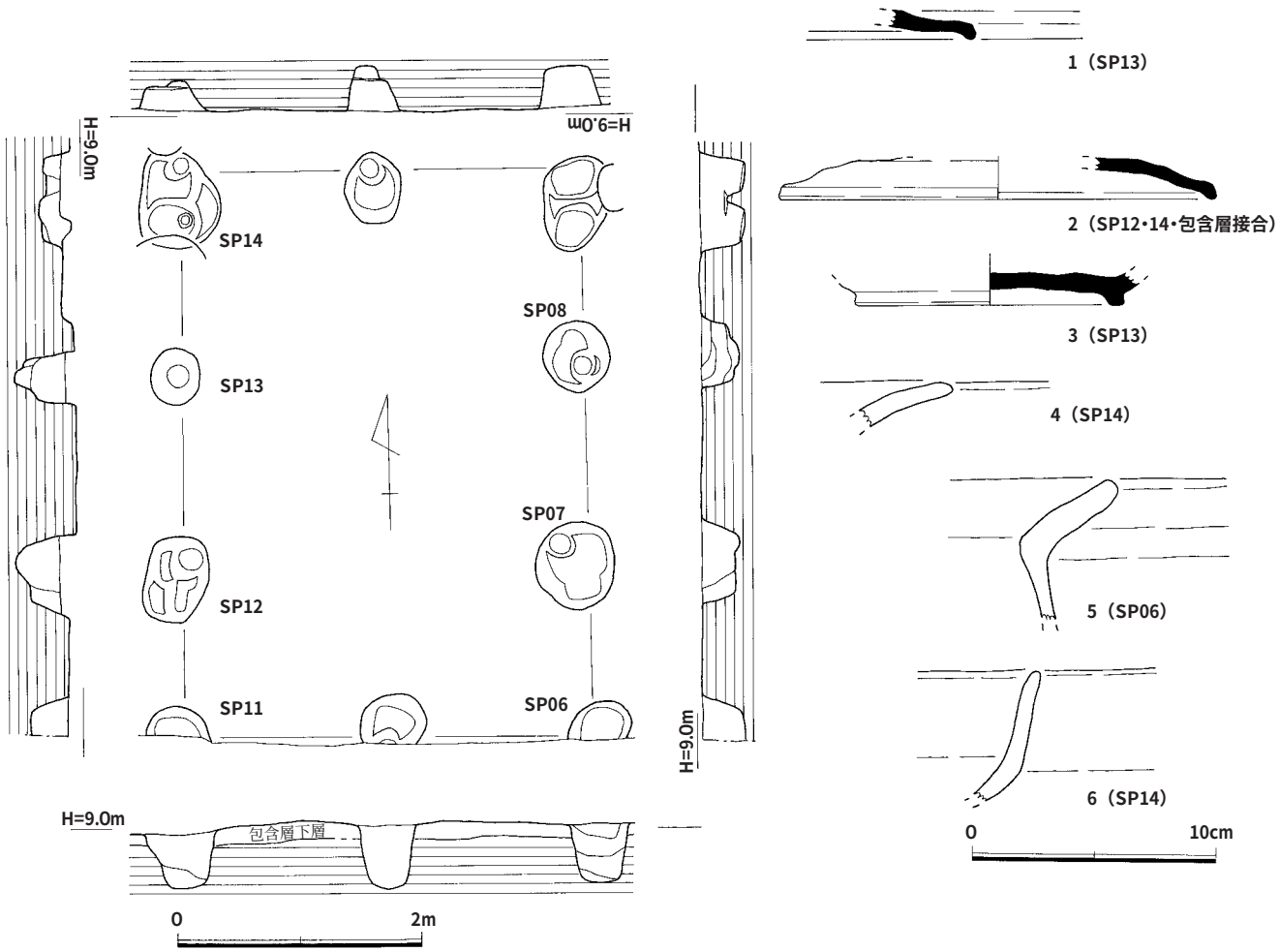
２間（３ｍ）×３間（4.2ｍ）を呈する東西棟である。主軸方位はＮ－88°－Ｅである。柱穴は一辺40～60㎝の平面隅丸方形を基本とする。柱痕跡は認められないが、ＳＰ16の底面には径15㎝の柱圧痕が残っている。いずれも柱穴埋土は暗褐色土と黄褐色ロームの混合土である。この南側で確認したＳＢ102とは互いの桁行きと梁行き柱穴が同一の柱筋で確認されている。土師器・須恵器の小破片が出土しているが、摩滅等も進んでおり図化できる遺物はない。

ＳＢ102（第６図）

２間（3.3ｍ）×３間（4.6ｍ）を呈する南北棟である。主軸方位はＮ－２°－Ｗである。柱穴は平面隅丸長方形を基本とし、埋土は暗褐色土と黄褐色ロームの混合土である。ＳＢ101同様に柱穴の掘削深はほぼ近いレベルでそろっている。土師器甕・碗、須恵器蓋坏等が出土している。なお個別図面では図示していない。建物北列の北側にＳＰ24を含む相対する柱列がある（全体図参照）。埋土は暗褐色土で検出面からの深さは30㎝前後である。建物と非常に近接している。関連をもつものであろうか。



第５図　ＳＢ101実測図（1/60）



第６図　ＳＢ102及び出土遺物実測図（1/60、1/3）

写真５　ＳＰ06土層

写真６　ＳＰ07土層

写真７　ＳＰ08土層

写真８　ＳＰ11土層

写真９　ＳＰ13土層

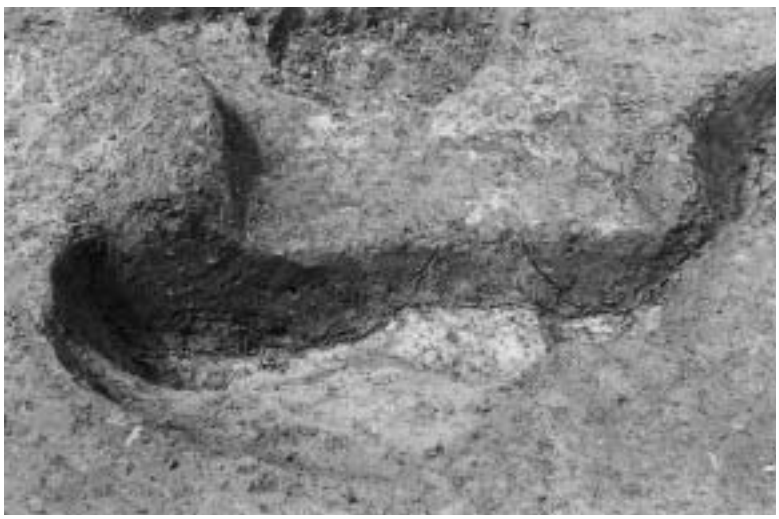
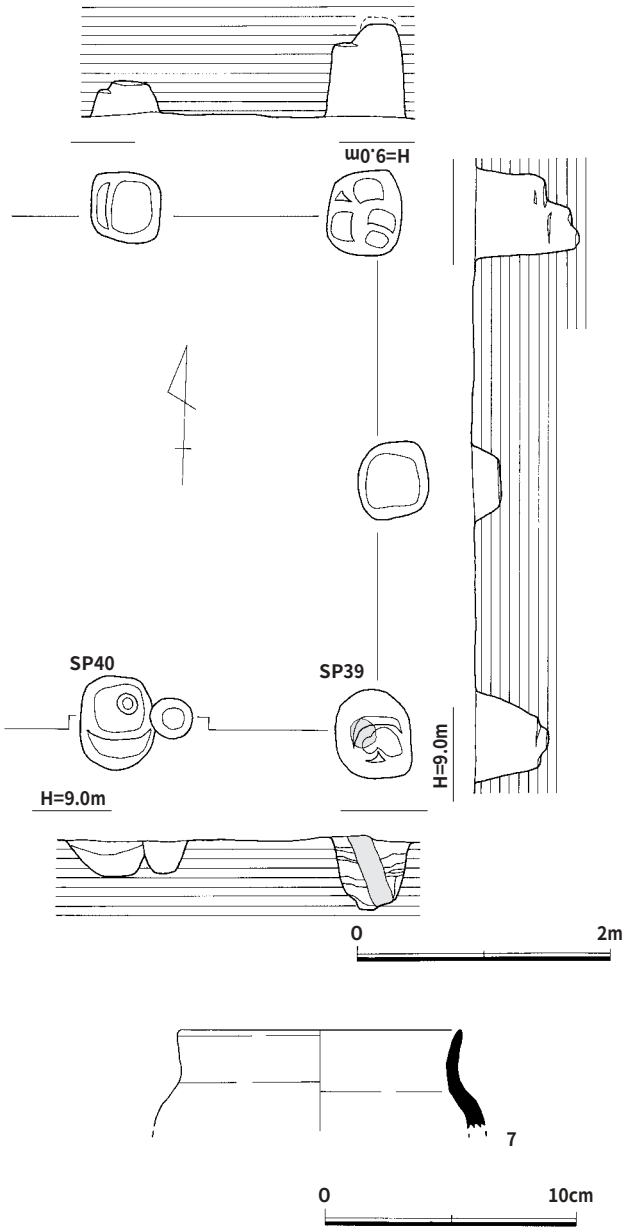


写真10　ＳＰ14土層



第７図　ＳＢ103及び出土遺物実測図（1/60、1/3）

出土遺物（第６図）

１～３は須恵器蓋坏である。１・２は蓋でいずれも天井部外面はヘラ切りである。胎土には微砂粒を含む。色調は１が灰白色、２は口縁部内外面が黒灰色、天井部及び内底面はにぶい褐色を呈する。また２はＳＰ12・14と包含層上層の遺物が接合したものである。３は高台付き坏である。高台は屈曲部付近に貼り付けられ、外底面にはヘラ削りは行われていない。色調は灰白色を呈する。

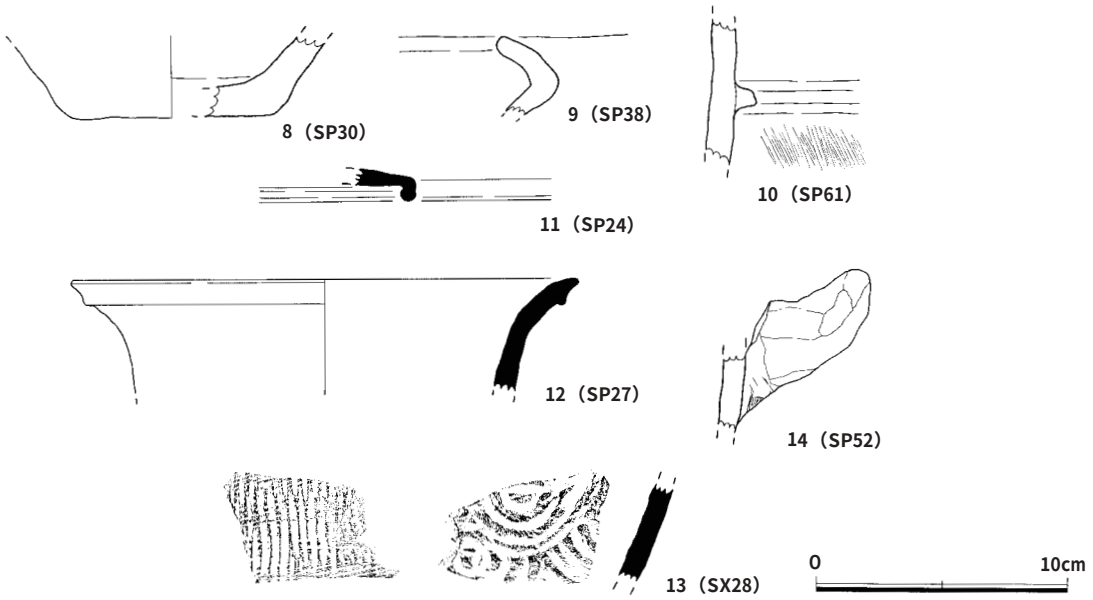
４～６は土師器である。４・５は甕の口縁部である。口縁部は大きくハ字状に開き、胴部内面はヘラ削りが行われる。胎土には微砂粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈する。６は椀破片である。胎土には微砂粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈する。

ＳＢ103（第７図）

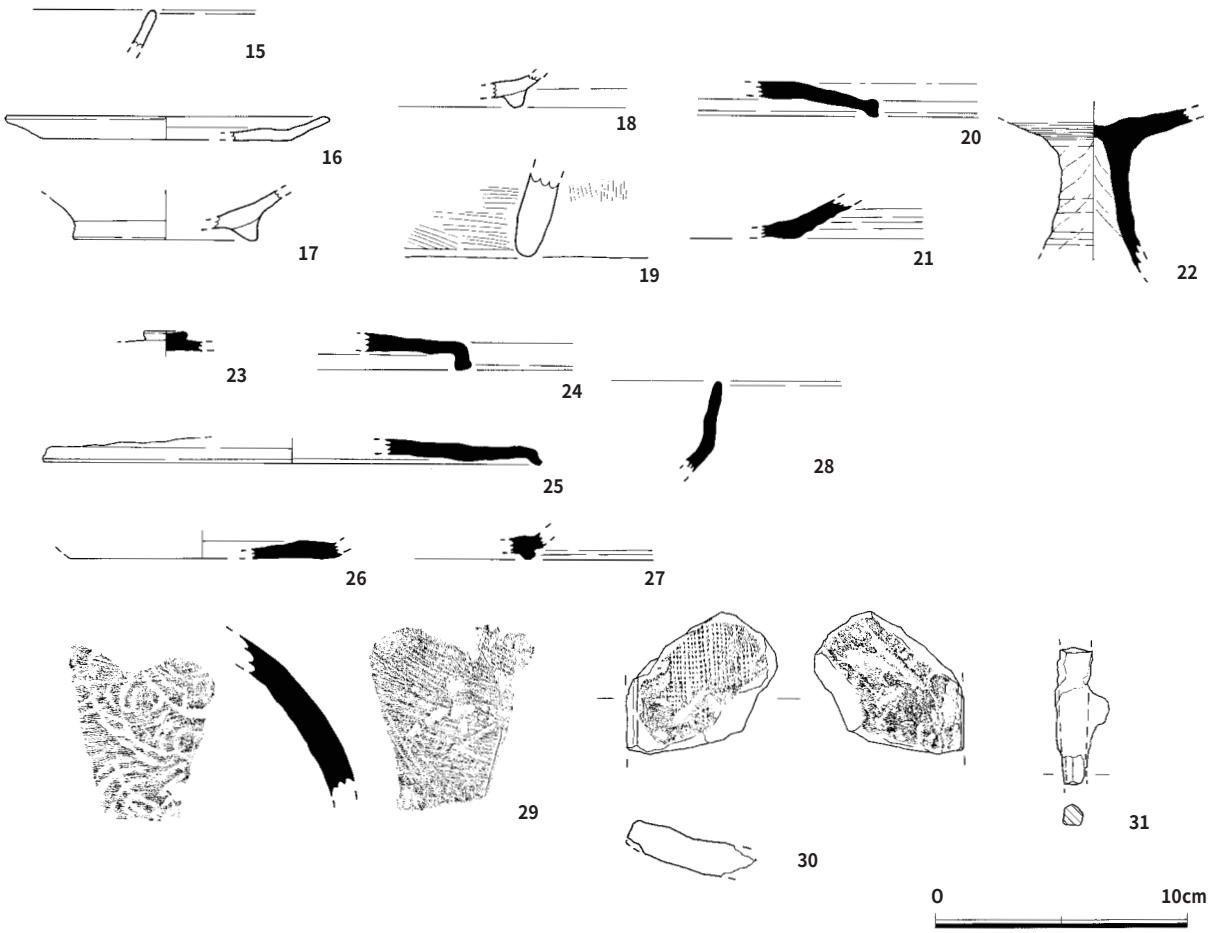
南北２間（3.4ｍ）×東西２間以上（１間1.6ｍ）を呈し、主軸方位をＮ－２°－Ｗにとる。ＳＢ101・102の西側に位置し、南側柱列が、ＳＢ102の南から２列目の柱列にほぼそろう。柱穴は平面隅丸方形を基本とする。ＳＰ39では傾斜した柱痕跡が確認できた。土師器及び須恵器の小破片が出土している。東西棟になるものと考えられ、隅柱の掘削深が他より深くなっている。

写真11　ＳＰ39土層

写真12　ＳＰ40土層



第８図　その他のピット出土遺物実測図（1/3）



第９図　包含層出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第７図）

出土遺物はいずれも小破片で図化できたものは１点のみである。７はＳＰ40から出土した須恵器の直口壺である。灰白色を呈し、石英微砂粒を含む。

２）その他のピット及び包含層出土遺物（第８・９図）

第８図はその他のピットからの出土遺物である。ピットから出土した遺物は弥生時代中期後半～後期、古墳時代後期～古代のものがある。ピットの埋土も黒褐色土系のものと暗褐色土主体のものに分けることができ、それぞれが対応するものと考えられる。弥生時代に位置付けられるピットは竪穴住居跡の竪穴部分が失われた可能性が考えられる。また本調査区内では褐色土系の中世に位置付けられる埋土のピットは見られず、この時期の遺物も包含層中に僅かに見られるだけである。８～10は弥生時代の遺物である。８は平底の底部破片である。９は袋状口縁部破片である。10は突帯を有する胴部破片である。外面縦刷毛を行い、内面はナデである。11～13は須恵器である。11は蓋である。外底面にはヘラ削りは認められない。12は甕の口縁部である。頸部は外反気味に立ち上り、端部は面取りを行っている。13は胴部破片である。外面は擬格子の叩きを行い、内面には青海波文の当て具痕が残る。14は土師器の把手である。下方接合部に小口痕跡と刷毛目が残っている。

第９図は包含層出土遺物である。包含層は褐色土（上層）・ロームを少量ブロック状に含む暗褐色土（下層）の２層に分けることができる（第４図）。上層からは土師器・須恵器・弥生土器に混じって少量であるが青磁・白磁、土師皿等が出土しており、少なくとも中世以降の堆積と考えられるが、近世に位置付けられる遺物は現状では認められない。これに対応する包含層は周辺の調査でも確認されているが、本調査地点を含めていずれもこの上面から掘り込む遺構は確認されていない。また下層からは土師器・須恵器・瓦等古代を中心とした遺物が出土しており、掘立柱建物はこの包含層を掘り込んで建てられている。調査時に竪穴が欠失したと考えられる弥生時代のピットが確認されていることから考えると、この包含層は古代の段階で施設建設のため、削平を伴う整地を行った時に形成された可能性も考えられる。15～22は上層出土遺物である。15は青磁口縁部破片である。16～19は土師器である。16は土師器坏である。摩滅が進み切り離しは不明である。17・18は高台付き椀・坏である。19は甑底部であろう。内面には煤が付着している。20～22は須恵器である。20は蓋で、天井部外面は回転ヘラ削りを行う。21は外底ヘラ切りの底部破片である。22は小型高坏である。23～31は下層出土である。23～29は須恵器である。23～25は蓋である。23には扁平なつまみが貼り付けられる。24・25は天井に回転ヘラ削りは行わない。26・27は坏、28は椀である。26は外底面回転ヘラ削りを行う。29は甕の胴部である。外面にはカキ目状の痕跡が残る。内面は青海波文の当て具痕の上から横ナデを行っている。30は須恵質の平瓦である。凸面には縦方向のナデが認められ、凹面には模骨痕と布目が残る。31は茎状の鉄器である。

３）小結

今回の調査では包含層及び８世紀代の建物群を確認することができた。３棟の建物はほぼ磁北に軸をそろえ、有機的関連を有するような配置となっている。また建物の建設にあたっては面的な造成工事が行われた可能性も考えられる。該期の遺構については周辺の調査事例の成果とあわせ考える必要があるが、那珂遺跡群においてはこの時期に真北方位の直線溝が確認されており、面的な瓦の出土も見られるところである。この他ピット・包含層中から弥生時代中期後半～後期、古墳時代後期～古代、中世の各時代の遺物が出土している。

書名ふりがな　なかよんじゅう
書　名　那珂 40
副書名　―那珂遺跡群第 96 次調査報告―
巻　次
シリーズ名　福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号　844
編著者名　長家　伸
編集機関　福岡市教育委員会
発行機関　福岡市教育委員会
発行年月日　20050331
作成法人ID
郵便番号　810-8621　電話番号　092-711-4667
住　所　福岡市中央区天神 1 ― 8 ― 1
遺跡名ふりがな　なかいせきぐん
遺跡名　那珂遺跡群
所在地ふりがな　ふくおかし はかたく たけした 5 ちょうめ 452の 1 ばんち
遺跡所在地　福岡市博多区竹下 5 丁目452-1番地
市町村コード　40132　遺跡番号　38-0085
北　緯　33°34′3″
東　経　130°26′9″（世界測地系）
調査期間　20040405―20040419
調査面積　90
調査原因　消防団移転工事
種　別　集落
主な時代　古代
遺跡概要　集落　建物 3 ＋土師器＋須恵器
特記事項

福岡市埋蔵文化財調査報告書第844集

那　珂　40

―那珂遺跡群第 96 次調査報告―

2005年（平成17年）3 月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印　刷　有限会社浦永印刷
福岡市東区原田 1 丁目 9 番23号